

便利屋が目撃! ニッポン裏事情

第1回

家の片づけ

数十万円払ってでも 片づけてほしい人たちの 諸事情とは?

「片付けて」、「代わりにやって」。日々舞い込む仕事は今の日本を映し出す。便利屋から見た日本の裏側

今月の便利屋さん

木下 修さん

アクト片付センター代表。都市計画コンサルタント等を経て、2000年に便利屋として独立。現在は片付け専門。神奈川を拠点に、関西や九州など、全国に同業のネットワークを持つ



依頼①
「私の家を片付けて」と、かけこんでくるアイドルの卵

私は、空き家や、一般個人が手に負えないほど散らかった部屋の「片付け屋」をしています。開業当初は様々な仕事を請け負



自分はキレイに着飾っても、部屋は恐ろしく汚い。このギャップはどこから生まれるのか? 今日もまた「キレイな人」の「汚い部屋」を片付ける

う便利屋でしたが、あまりにも依頼の多い片付け屋に特化しました。仕事は毎日あり、昨日も9件。お客さんもさまざまで、教師やパイロット、CAや看護師など社会的地位のある人も多いです。ね。

「片付け代」をキャバクラで稼ぐ若い女性も!

一軒丸々やると、数十万円ぐらいかかる片付けですから、散らかり具合はハンパではないことも多々あります。足の踏み場

がないなんて序の口。天井に達するほどゴミが積み上がった光景も珍しくありません。

極端な例ですが、先日、床一面が腐ったヨーグルトの「沼」になっていた家を片付けました。このレベルの依頼は、さすがに月1件くらいですね。

リピーターも多いですよ。その一人に、アイドルの卵の若い女性もいます。アイドルの仕事の収入だけだと毎回の片付け料金が払い切れないからと、「キャバクラでバイトを始めましたあ」なんて言っていますけどね。

だったら自分で片付けたほうがいいじゃないか、などとも思いますが、彼女のような「片付けられない人たち」も、じつは自分で片付けたいんですよ。

その証拠に、ゴミの山から、掃除グッズや整理整頓の本が山ほど出てきますから。でも、なぜかそれができず途方に暮れてしまう…。他の部屋の人に迷惑をかけたくないからと、やむな

く数十万円を支払うのです。

その思いに応えたいので、私も、単に片付けるだけでなく、散らからなくなる方法をアドバイスしています。1回で済めばそれに越したことはないですから。どうしても散らかるなら、「部屋の状態が悪くなる前に呼んで、片付け料金を節約するように」と言っています。アイドルの卵の彼女も、最近では半年に一回ぐらいの利用に落ち着いていますね。

依頼②
亡くなった親が遺した写真を処分してほしいと頼む、子どもたち

「自分の親の家を片付けてほしい」と親族から頼まれることも増えました。バブルの頃に入居したニュータウンの家。そこから子どもが巣立ち、ついには親も亡くなった。施設や病院に入って帰ってこれなくなる…。こんなパターンが多いんです。

「家族の写真を捨てて!」目を疑う仕事もある

かつての幸せな家庭を想像し、一抹の寂しさも感じます。さらにそれに追い打ちをかけるかのような依頼主の指示もあります。

依頼主の親の家を片付けていると、依頼主がまだ子どもの頃の写真がよく出てくるのですが、とっておくかと聞くと、「要らないから捨てて」といわれることがよくあるのです。

紙の写真ですから、捨てたらこの世から永遠に消えます。さすがに「家族の思い出を捨てちゃうんですか?」と聞くと、「母の思い出であって、私の思い出じゃない。こんな小さいときのこと覚えてないし」などといわれてしまうのです。

家族の問題に立ち入れませんから、私もそれ以上何もいいませんけど。家族の絆が変化していることを、この現場ではリアルに痛感させられます。